

広報

— 5 卷 5 号 —

昭和 48 年 7 月 10 日発行

目 次

| | |
|-------------|-----------|
| 核分裂生成物と私 | 齋藤信房…(2) |
| 東大百年史 | 今井功…(3) |
| 古い時代の小石川植物園 | 田中康義…(4) |
| 数学教室と受付 | 羽鳥浅子…(6) |
| 戦後未だ終らず | 西島和彦…(7) |
| 中央アジア旅行記 | 木村敏雄…(8) |
| 私の読んだ本(3) | 吉野誠治…(9) |
| 私の提案(2) | 吉野誠治…(9) |
| 《学部消息》 | 藤原鎮男…(11) |
| | (14~20) |



シナノキ *Tilia japonica* (Miq.) Simonkai

病院前に日本特産のシナノキがある。中国原産のボダイジュも同属で、病院裏に大木があり6月に開花する。前者は葉裏の一部にだけ褐色毛があり、後者は裏全面に星状の白色毛があるなど両者の区別は容易だが、写真のように花序はへら形の苞の中央から伸び、花弁に対生して仮雄しべがあり、葉は左右不整で葉脈が鋸歯に入る等共通の特色も著しい。そのため葉一枚の化石でさえも属が同定できる。歌曲で知られる *Lindenbaum* はヨーロッパ原産で、和名をセイヨウボダイジュといい、小石川植物園にある。なお仏教の聖樹菩提樹はインド原産のクワ科の常緑高木で全くの同名異物である。(大橋広好：植物)

核分裂生成物と私

齋藤信房 (化学)

核分裂の結果生れる産物である核分裂生成物 (FP) と私の出会いは昭和 14 年であったからすでに三十数年以前のことである。当時学部学生であった私は、理研で仁科芳雄、木村健二郎両先生の御指導のもとに 93 番元素の生成の可能性や新しい核分裂生成物の同定の実験を行っていた。もちろん私は学部の学生であったので、両先生の御手伝いをするに過ぎない、いわゆる“小僧”であったわけである。私どもの実験は非常に面白く、今から見ればまことに小型な理研サイクロトロンを用いて 8 種の新しい FP を見出すことができた。仁科・木村チームの業績は国際的に高く評価されていたので、そのお手伝いをするのができたのは幸せなことであった。

それから三十数年を経た今日、FP はいろいろの意味で科学者の関心を呼んでいる。今日 FP は使用済の核燃料から大量に得られ、その中には有用な放射性同位体 (RI) も含まれているので、これらを分離精製して利用することができる。Kr-85, Sr-90, Tc-99, Cs-137, Pm-147 などの RI が、放射線源、熱源さらに蛍光塗料、心臓ペースメーカーその他として利用されることはよく知られている。しかし、一般にあまり知られていないのはロジウム、パラジウム、ルテニウムのような貴金属の同位体が FP としてほとんど放射能のない状態で得られることであろう。その量は無視できないもので、米国の動力炉についての資料によると、同国の動力炉から出る使用済燃料の再処理廃液から回収される貴金属の総量は、ロジウムについては今から約 10 年以内、パラジウムについては今世紀末ごろに、鉱山から採掘される鉱石から生産される量を超える可能性が十分であるとされている。FP を原料とする貴金属の比放射能が微弱であれば、化学工業に利用する場合も差支えないので、FP 貴金属の生産はこれらの金属の市価にも恐らく影響を及ぼすものと思われる。これはまさに現代錬金術の成果である、といってよい。

FP は以上のように有効に利用できるが、RI として利用できる FP の量を動力炉の運転に伴って生ずる FP の全量に比較すればわずかに数パーセントにすぎない。したがって残りは高放射性 FP 廃棄物となり、これは大変な厄介ものである。最近の予測ではわが国の原子力発電設備の容量は西暦 2000 年ごろには約 220 GW に達する

とされている。もしそうであるとすると使用済燃料の量は 2000 年には 4500 トン/年となり、半減期 1 年以上の FPRI の量は 8×10^9 キュリー以上となることが予測される。このような大量の放射性廃棄物をどのように安全に処理するかは頭の痛い問題であり、多くの人々によってできるだけ環境汚染を起さぬような処理処分方法が提出されている。しかしこれらの月並な処理処分方法のほかに、FP の放射能を人工核反応によって積極的に減少させる方法 (いわゆる消滅処理) を考えようという動きがある。最近核分裂生成物等総合対策懇談会 (木村健二郎座長) の消滅処理ワーキンググループではつぎのようなアイデアを提出している。このグループでは高エネルギー陽子による核反応の利用が考えられている。たとえば高エネルギー陽子により原子番号の高い元素のターゲットを衝撃すると破砕反応により多量の中性子が発生する。そこでたとえば 10 GeV、大電流の陽子加速器をつくりそれを用いて Pb, U のようなターゲットを陽子で衝撃し発生する中性子で Sr-90 を消滅処理する可能性が生れる。もちろんターゲットからも RI が生れるが長寿命の RI の生成は少ないと考えられる。また Cs-137 を陽子で直接衝撃すると Cs-137 がこわれるとともに多量の中性子を得ることができるが、10 GeV 陽子 1 コにより約 85 コの Cs-137 が破砕され、このとき発生する中性子数は 125 コ程度と推定されるのでこれを用いて Sr-90 等を消滅処理する可能性も考えられる。

このためには高エネルギー陽子加速器とそれを運転するための発電所、さらに化学分離 (ときに同位体分別もふくめて) プラントが必要となり、経費もぼう大となる。したがってこのような巨額の経費を投入してまで消滅処理をすべきかどうかは人によって意見の分れるところであろう。しかし、私の知る限り、この種の核反応を行う際の核反応断面積その他の基礎的な核データはあまりにも乏しい。消滅処理の実施の如何を問わず、科学者のやらねばならぬ仕事は沢山あることは確かであり、私のような放射化学者も再び“小僧”としてお手伝いできそうである。もし、このごろの多岐な雑用から開放され、三十年数年前のように FP の実験を行なうことができれば私はまことに幸せであり、そのような時期の到来を待望したい。

東 大 百 年 史

今 井 功 (物理)

いまから4年後の昭和52年すなわち1977年には東京大学は創立100周年を迎える。これを記念するために「東京大学創立記念事業準備委員会」が発足したのは昭和42年(1967)5月のことであった。続いて同年7月には「東京大学百年史編纂準備委員会」がその第1回の会合を開き、史料編纂所長の竹内理三教授が委員長に選任され、数回の会合を経て翌昭和43年(1968)5月には百年史編纂の基本要綱案がほぼまとめられた。これを受けて6月には当理学部でも、「東大百年史編集理学部委員会」が組織され、毎月第2水曜日に定例的に集まることになった。その第1回は7月10日であった。9月、10月と定例会は順調に進むように見えたが、予定された10月、11月の例会は開催されないままに終わった。東大紛争の激化のために百年史どころではないという学内情勢になったからである。

理学部委員会のメンバーは、河田(数)、今井(物)、末元(天)、浅田(地球)、藤原(化)、高宮(化)、木下(動)、門司(植)、渡辺(直)(人)、高井(地質)、竹内(鉱)、吉川(地理)の諸氏であった。東大百年史編纂準備委員会へ理学部から小生が出ていた関係で、理学部委員会での世話役を引き受けたわけである。

昭和43年に激化した東大紛争のため百年史編纂の作業は中絶の状態になった。ようやく最近、「東京大学創立百年記念事業企画委員会」が新しく設けられた。紛争による空白の期間はまことに惜しい。百年史編纂委のメンバーも半数以上退官された今日、どのような形で再開されるか明らかでない。また百年史そのものの実現についてもあやぶまれる現状である。しかしこの時点で当初の構想を想起することも無意味ではなからうと思われる。

「東京大学百年史編集の基本要綱案」から抜き書きすると、「編集の目的」は、「わが国の近代国家および近代社会の発展に中心的役割を果たした人材育成の場としての東京大学および学術発展の指導的役割を果たした学問研究の府としての東京大学の果たした歴史を明らかにするとともに、将来の大学のあり方についての考察にも資する」とうたわれている。また「編集・執筆の基本方針」とし

ては、(イ)大学の制度史考察は勿論であるが、むしろ東京大学および東京大学関係者のわが国の国家社会および学術発達への寄与、影響等に重きをおく。(ロ)資料の収集は各部局に固有の資料は勿論、ひろく新聞・雑誌等にあらわれた東京大学および東京大学関係者に関する記事等もすべて収集する。(ハ)資料は、文献資料のほか、生存長老・関係者からの聞きとり、絵画・写真・遺物等あらゆるものを含む。(ニ)各部局委員は、各部局固有の(ロ)、(ハ)の資料の収集、編纂、執筆を担当し、本部委員は、東京大学全般に関する(ロ)、(ハ)の資料も収集、編纂、執筆する。各部局委員は、(ロ)、(ハ)のうち、各部局の果たした学術的役割についてとくに重きをおく、などが挙げられている。

「百年史」の規模は、総巻数全20冊(各冊A5、600~1000頁)、A. 通史編:1~5巻(東京大学前史、明治10年まで;明治30年まで;大正年間;昭和22年まで;以後)、B. 各論編:6~10巻(各部局の学術研究発達史)、11巻(学生史)、12巻(建築史)、C. 資料編:13~16巻、D. 別編:写真集、百年史概説、英文百年史、百年史年表、となっている。

1977年まではあと4年足らずしかない。上記の構想をそれまでに実現することは到底不可能であろう。しかし、100年史そのものが1977年に完成することも必ずしも必要ではなからうと思われる。たとえば、「東京帝国大学五十年史」が発行されたのは昭和7年11月で、創立満50年の昭和2年より遅れること5年であった。全東大の100年史の実現はともかく、われわれ理学部としては100年の歴史を省ることは極めて有意義のことであろう。この機会に各教室の歴史的資料をできるだけ集めておきたいものと思う。とくに名誉教授をはじめ長老の先生方をお願いして、教室にまつわる逸話のたぐいなどもメモの形にでもして残して頂ければ幸いである。理学部便覧や理学部会誌、あるいは各教室の行事記録なども貴重な資料であろう。とくに、最近数年間の紛争に関する各種の文書は東大百年史のうち最も重要な激動期を示す資料として散佚を防ぎたいものと思う。

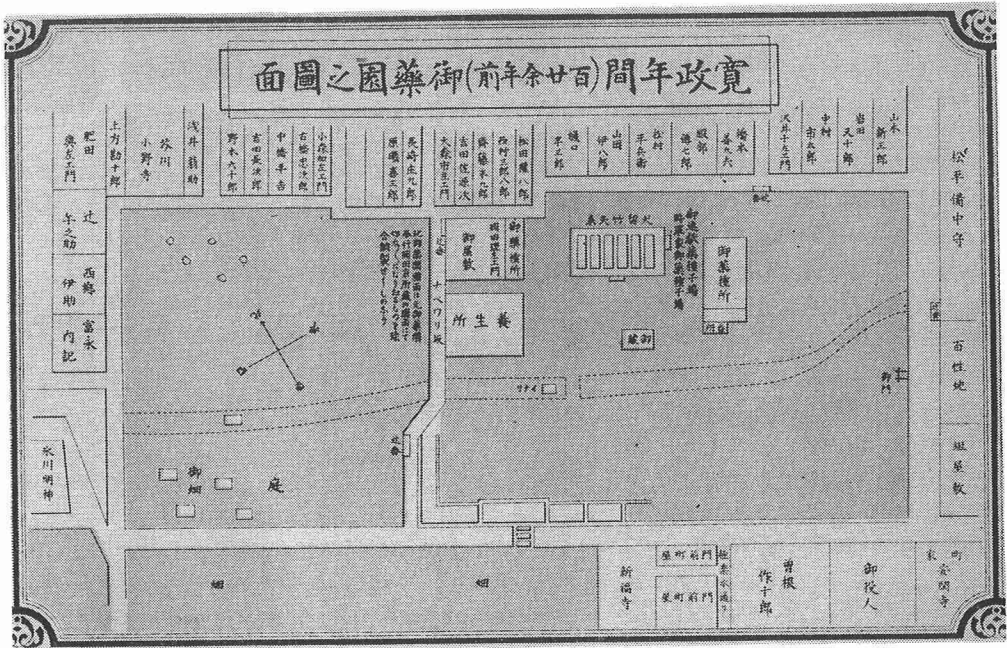
古い時代の小石川植物園

田中康義 (植物園)

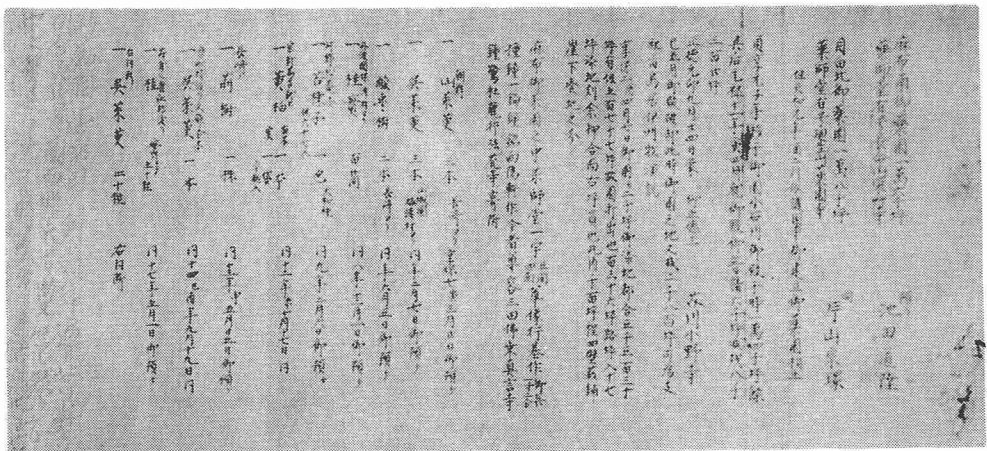
小石川植物園のことについては、上田三平著日本薬園史の研究 (昭和5年)と、小倉鎌著 東京帝国大学理学部植物学教室沿革、附、理学部附属植物園沿革 (昭和15年) および、明治前半期の小石川植物園 (日本植物園協会々報昭和33年) に詳細な報告、研究が出版されてい

るので、今さら蛇足を加えることも無いがこれらを見る機会が少ないので繰返しになるが、薬園時代と明治前後の変革期を過した東京大学理学部附属植物園を記して見たいと思う。

徳川時代小石川薬園は官園であり、時代により広狭は



第1図 大正四年東京帝国大学発行の“植物園一覽図及び沿革誌参考図類”(室田老樹斎誌)の部分図



第2図 伊藤圭介の間合せにより芥川小野寺より伊藤圭介に渡せし書状 (本状を明治10年6月28日自宅を受取ったという伊藤圭介の文章が左端に赤字で書いてある)

あったが現在の小石川植物園とはほぼ同じ面積で、中央より南と北に分かち、南側を岡田利左衛門、北側を芥川小野寺の両者に預け、世襲で薬園の管理をしており、明治になり、これらの土地と薬園内に設けられた八大名の下屋敷、養生所など旧薬園時代の場所が現在の小石川植物園となった(第1図)。

明治10年芥川小野寺より伊藤圭介に贈った書面があり(第2図)、これによると貞享元年(1684年)小石川御殿の14,000坪余(460,000m²余)に、麻布南薬園(池田道陸預り)と目白北薬園(片山宗環預り)の薬園を移し、目白北薬園は天和元年(1681年)護国寺建立のため廃止し、元禄年11年(1698年)には白山御殿の普請のため薬園は8,320坪に减小した。これに加えて享保7年より17年までの、おもに朝鮮、中国産の薬木の苗や種子の受入れ記録が付いている。

麻布薬園は日本薬園史によると品川の薬園稀に目黒薬園と称され、現今の麻布富士見町広尾光林寺の右隣りに当り後に土屋相模守の屋敷のあったところで今の四の橋は相模橋といいそれ以前は薬園橋と称えていたという。この薬園の中に薬師堂があり、長命山栄草寺といい、稲荷の小祠もあり、のち小石川に移され、芥川薬園の内に祭られ、これは幕末の図面によると、現在の大イチョウの近くに長命山稲荷と呼ばれ書入れている。

享保6年(1721年)この時まで御花畑と呼ばれていたが、将軍吉宗の復古の旨により、御殿地の全部を加えて薬園とし、現在の植物園面積と同じ位となり、中央に往来を設け、芥川小野寺には従来からの薬園(有来薬園)を拡張、東の方現在植物園の本館、温室、正門の有る所は新しく小普請岡田利左衛門に預けられ、その後面積は狭められたがそれぞれ幕末まで世襲して来た。

徳川時代薬園内に設けられ有名になったのは、養生所^{ヨウジヤウジヤウ}と甘藷の試作であり、養生所は施薬院とも呼び俗に、貧病院、ライ病院等ともいわれたが、小川笙船^{シヤウケン}の申言により、享保7年薬園内に、東西32間、南北31間を区切り設立、町奉行の支配下で一般を対象とした唯一の施療機関であり、全て無料で享保14年には最大150人を収容、医師は、本道、外科、眼科を併せ、89名に達したという。植物園中央付近に、その当時使用した井戸が現存している。

甘藷栽培の試作は、昆陽青木文蔵が加藤又左衛門を通じて大岡忠相に申言、養生所の一部と崖下の一部に約

300坪さつまいもを試作、同時に千葉県幕張にも試作し成功、以来関東一円に甘藷の栽培が普及したといい、現在養生所内試作跡には旧園長松村任三筆になる記念碑が建っている。

明治元年薬園は時の医学所頭取、前田杏斉が受取り、当時幕府関係の薬園は小石川をはじめ九段坂上、番町、駒場も含まれていた。

医学校は度々その所属を変え東京府、鎮将府、昌平学校と代ったが明治2年東京府の大病院と合併、薬園は医学校薬園、またその名称変更により、大学東校薬園、大病院が東京府に移り東京府大病院附属御薬園となり、4年に大学を廃止し文部省を設立、植物園は文部省の直轄となり、博物館に所属、この博物館は大学南校の物産局を引続いたもので、幕府番書取調所物産掛に源を発している。6年文部省博物館、書籍館と共に太政官博覧会事務局に合併始めて日を定めて一般に公開したという。この博覧会の事務局の所轄したものが現在の国立の図書館、博物館の源流となっている。

明治8年博物館(文部省博物館のち教育博物館)所属小石川植物園と呼び名実共薬園から植物園となった。大学南校、東校は学区制の変更等と共に名称は変ったが現東京大学の前身で、明治10年両者を併せ東京大学として出発、植物園も大学に併合、東京大学小石川植物園となり、当初は学内所属がはっきりしないので、法文理、3学部附属植物園、また東京大学附属と度々変ったが明治19年帝国大学となり、帝国大学植物園、続いて帝国大学理科大学植物園とその所属名称の変わるにつれ植物園の正式名称に変化があり、名称のみならず内容、人員も時代の過し方に表われている。

帝国大学となり、植物学は飛躍的に発展、小石川植物園の園内も充実、明治21年に入園料を徴集し開園、29年頃に温室も現在地に移し30年帝国大学構内から植物学教室も移し、現状の基礎ができた。この植物学教室は昭和10年本郷の2号館に移るまで幾多の人材を輩出し日本の植物学発祥の地ともいえる。その間関東の大震災で植物園、教室共多くの被害を乗り越え復興したところ、昭和20年の5月の大空襲により歴史ある建物、植物等多くのものが焼失した。昭和44年園内の一部に再建されたのが旧東京医学校本館であり、大学発祥の由緒と共に重要文化財に指定、歴史を物語っている。

数 学 教 室 と 受 付

羽 鳥 浅 子 (数学)

5月中旬に地理教室の小堀先生から理学部広報に何か書くようにとお電話がございました。広報の執筆者を拝見致しますと、どうも私などが書く筋合ではなさそうでしたのでおことわり申し上げましたが、これからは広い範囲の方々書かれる由で、お引うけ致しました。広報は、ずっと読んでおりますが、多くは私には理解出来ない難しい学問的なものから、時には昔の先生方が馬で通われたお話しした教授会メモなどがのり、2、3年前までは数学教室以外のことは全く知らなかった私ですが、理学部の各教室は随分多方面にわたっているものと感心もし、新鮮な思いをよせて読んでおります。

さて前置きが長くなりましたが、理学部1号館旧館入口から3階に昇ったところに数学教室の受付があります。3階の薄暗さとは打って変わった雰意気のホテルのロビーにも似つかわしいサロン風の明るい部屋がパッと目につきます。この受付共同研究室は改装工事の折河田先生が大変力を入れられて作り、あの時には理学部の会計の方からぜひとどおしかりを受けました。理学部各教室の先生方、これから数学にお越しの折には、ここに一寸お寄り頂けませんか？ 椅子は上等ですし、またいろいろの花類も見事に育てております。これらは受付のおばさん方(通称こう呼んでおります。三宅さん、江副さん)が丹誠こめて育てたものです。例えば天井に届かんばかりのゴムの木は、前の花屋さんから数年前150円で秘書が買って来て退職の折置いて行ったものです。この木一つ見てもおわりのように受付の方の人柄がしのべれます。時には20坪あまりのこの部屋が先生方、学生で一杯になる程です。たまには三宅さん、江副さんを中心として井戸端会議的に卒業生のニュースソースの場ともなりますが、ほとんどは数学の話して持ちきりです。黒板も置かれゼミの立て割りでなく専門に関係なく先生方から学生、時には卒業生も含めて数学の話に口を飛ばしていることしばしばです。私は日本の数学が世界数学界の中で引けをとらないのも、この受付共同研究が大いに力しているものと思います。しかしこの受付も、数学教室の歴史が育てたものと思います。

受付の歴史といえ一寸大げさですがまた1884年の1回生の頃からのことはさだかではありません。しかし私の知る戦後の約1/4世紀の経験から考えるとかなり

前からのようです。私が参りましたときは、石田とらさん、高谷たけさん(逝去)の2人がおりました。石田さんは昭和の初めから30余年この受付にいた、いわゆる主の方でした。この方は稀に見る奇特の方でした。その頃は辻先生、末綱先生、弥永先生、福原先生の各教授と岩沢助教授、須藤助手、福富助手、玉河副手、竹内副手の図書に女性が2人でした。辻先生は朝の7時20分までには出勤されました。石田さんは7時10分には大学に来てその時までにお茶をわかつて用意しておりました。辻先生は昼食を召し上がるとすぐお帰りになられます。正午前後から3時頃になると弥永先生が出勤され、こちらの先生は夜おそくまで学校におられます。その頃石田さんのカントクの下で毎日池之端あたりまで時には助手学生も含めて、湯わかし用の薪を拾いに行きました。非常にこわいおばさんということで通っておりましたが、非常に優しい方でした。今大先生になられた方でおばさんに一喝された方も何人かおられます。その頃勿論お湯だけでお茶は教室で買って下さいません。教職員学生からお茶代を集めて、お茶を買っておりました。石田さんは時には、お小遣を出して、オサツなどぶかして先生方とか私共に下さいました。そんなとぼしかった何年かが続いたあとの昭和20年代の終りごろお茶が教室の費用で買えるようになり、石田さんも大喜びでお茶を買って学生さんにまで気前よく振まうことにしました。ところがサー大変、この喜びも東の間、たちまち会計からおしかりを得ました。学生までお茶を振まうとはとんでもないこと、会議用だけしか買えないとのこと。それからまたお茶代を集めることにしました。勿論教職員および学生全員からです。これも20年余り続き1969年の紛争のとき教室会議の話題にのぼり、この時から中止になりました。三宅さん、江副さんのお二人も時代が違いますから薪でこそお湯は沸しませんが、ロビーよろしく身ぎれいにし、サービス精神もこの上なく行き届いておられます。学生も含めて、お茶のサービス、電話の呼び出し、果ては身の上相談にまでおよぶこともあるそうです。卒業生の方々もこの受付があるので、気軽に東大に立寄ることが出来るとよく私におっしゃいます。勿論土曜の5時まで、サービスこの上なしです。

この受付は、私の数学教室のご自慢の一つです。三宅

さん、江副さん、どうかこれから今までと変りなくあるいはそれ以上に頑張ってください。次々と世界の数学界の先端に行く先生方の育ての場所です。

終りに昨日石田とらさんにお目にかかりました。相変わらず大きな声で大変よろこんで下さいました。82 才の

オバアサンは耳が多少遠くなりましたが、天文の荻原先生のこと、数学の弥永先生、河田先生のことなど思い出され、お天気のよい日には大学に行きたいとのことでした。

戦 後 未 だ 終 ら ず

西 島 和 彦 (物理)

6 週間程のソ連旅行から帰ってくると、広報担当の清水さんから印象の薄れないうちに何か書けと言われた。私はロシア語も出来ないし、他にもソ連へ行かれた方は多勢いるし、群盲が象を撫ぜるような印象を書いても仕方がないので、個人的に強く感じたこと、すなわちソ連へ居残った日本人のことについて書きたいと思う。

クリミヤ半島における学会に出席し、キエフにある理論物理学研究所に暫く滞在してから日本へ帰る途中のことである。キエフからモスクウ、そしてハバロフスクまで飛行機で行き、そこからナホトカまで列車に乗った。

同じ車輜の中で日本人らしいおじいさんを見かけた。後で食堂で 50 才位の人と一緒にいるのを見かけた。ところが二人でロシア語で話をしているので、これはモンゴル人か何かかなと思っていた。列車がナホトカに近付いてくると、インツォリストの人から出国の書類が皆に配られた。すると例のおじいさんがやってきて、自分はロシア語は出来るが英語が出来ないから書類の書き込みを助けてくれと言った。そのおじいさんは広島の人で福井さんと言う。そして身の上話を始めた。

第二次大戦が始まる以前から福井さんは満州のハルビンに住んでいた。奥さんはロシア人で何人かの子供がいた。従って子供達は日本語とロシア語が話せた。今から約 30 年前に、息子の一人が 18 才の時に、日本の特務機関からその子供を通訳として働かせろと言ってきたので断ることも出来ずそのようにしたという。ところが実際にやらされたことは国境を越えてソ連領に潜入してスパイをすることだった。ある日ある少尉と一緒に偵察に出たところいきなり袋をかぶせられてソ連に連れて行かれた。その少尉は自分だけ隠れてそれを見ていたという。福井さんは特務機関に日参して息子を探してくれと頼んだが、遂にもう来るなと言われた。戦争が終ってから調べたところでは、その少尉は二重スパイだったとのことであった。

息子は——残念ながら名前を聞き忘れた。またもう 50 位なのにおかしいがこのように呼ぶことにする。——ソ連で 11 年間の重労働刑に服しているということが判ったという。農家で働いている時はまだ良いが、鉱山で働かされた時は餓死寸前のこともあったらしい。しかし日本人特有の機敏さで、見張りの兵隊の信用を得てだんだん楽な仕事につき、やっと生きのびたという。11 年の刑を終えてからはソ連国籍をとり、今ではクラスノヤルスクで部下 400 人を持つ程の身分になった。そしてロシア人と結婚し、子供も二人いるとのことである。

福井さんは外務省、厚生省、代議士などに頼んで是非とも息子が帰れるようにと八方手を尽くしたが、遂にらちがあかず、自分で何とかしようと決心したそうである。他の息子が日ソ貿易に従事してをり、その関係で福井さんはボルガグラード市から招待されたという。

福井さんは息子のいるクラスノヤルスクへ行きかけたかったが、ここは外国人が行くことは禁止されているのでどうしようもなかったが、ボルガグラード市長の尽力で、息子は休暇をとり、二人でハバロフスクのホテルでおち合い、そこで一週間を過ごしたという。もう自分が生きている間に二度と息子には逢えないと思っていただけに 30 年ぶりの再会には感慨無量だったと涙を流しながら語った。またハバロフスクでは、昔シベリヤ出兵の時に一兵士として戦ったこともあるので大変懐しかったとも言っていた。

息子はロシアに家族もおり、もう日本へ戻ることは出来ないで、何とかして一度日本へ帰らせることだけが今となっては唯一の願いだと語っていた。ただこの問題では誰一人頼りに出来ないで大変難しいだろう。そしてマスコミの力を借りれば出来るだろうが、マスコミは必ず真実を曲げて報道するから絶対に援助を頼みたくないと言っていた。

列車がナホトカに着き、いよいよ乗船する時福井さん

は息子と最後の別れの挨拶を交わしていた。

船の食堂ではある日本人の家族と同じテーブルになった。ところがこの人達はお互いにロシア語で話をしている。50歳を過ぎた母親と、25才の娘、19才の息子である。この母親はちゃんと日本語を話すのでいろいろと身の上話をし始めた。彼女は約30年ぶりで日本へ帰るというのである。終戦の時に樺太の敷香にいたが、いろいろの事情で引揚げるチャンス逃してしまったそうである。数年前に亡くなった夫は漁師だったが、腕の良いのをソ連側から見込まれてソ連の国籍を取ってしまった。娘は漁業関係の技師として働いていたし、息子は高校を卒業してから大学入試に失敗したので来年5月に赤軍兵士として徴兵されることになっていたとのことである。しかし母親と子供達との間に考え方の大きな断絶があり、小樽にいる母親の母親から生きている間に逢いたいという手紙を貰って、遂に我慢出来なくなり日本へ帰ることにしたのだそうである。しかしながら子供はソ連

で生れ、ソ連で育ち、日本のことを知らないのでもの妻く反対したという。そこで若し子供達が日本に馴染まなかったら、子供達だけまたソ連へ戻るという条件で日本へ帰るのだと語っていた。しかしこの許可を得るためにソ連の役所に通い、日本の政府に嘆願書を出したりして全財産をはたき尽くしたと言っていた。

しかしロシア人は個人的には全く親切だし、人種的偏見というものは全く存在しないので日本へ帰るのが不安であるとのことであった。だんだん馴れてくると子供達もぼつりぼつり片言の日本語で話をするようになった。

いよいよ日本が近付くとまた入国の書類を書いてくれと頼まれ、この家族が松前という名前であることを知った。

横浜港に着くと大勢の報道陣が待ちかまえていた。彼等は松前さん一家の取材に来ていたのであった。一方福井さんは東京に住んでいる一人の息子に迎えられ、ひっそりと帰って行った。

中央アジア旅行記

木村敏雄（地質）

5月31日から3日間のモスクワでの「オフィオライト討論会」が終わったあと、6月2日の夜に休む暇もなく飛行機に乗り、かつてのシルクロードに沿う小都市フェルガナに向った。オフィオライトはかつての海洋地殻であったと考えられ始めている。オフィオライトと一口に言われるものは、実はいろいろの岩石の集りで、その産状も多様である。確にかかつて海洋地殻であったと思われるものが、地中海のキプロス島などでみつかっている。しかし別の出来方をしたものも多いらしい。現地では実際に産状を見ることなしに、お互いのイメージが違うままで討論したのでは議論がすれ違うので、このような現地討論会が開かれるわけである。6月13日までの強行軍で、南天山山脈およびその西方延長部のオフィオライトを見学し、さらに西に飛んで小コーカサスのオフィオライトを見ようというのである。総勢は外国人約50名、ソ連人約100名である。

三日間の討論会のあとで、しかも夜行ということで、さすがに一同は疲れていた。しかし飛行場に降り立ったわれわれを、フェルガナのお嬢さん達が花束を持って迎えてくれたのに一同歓声をあげた。お嬢さん方の縦模様の原色の服と長く垂らしたおさげの髪が印象的であっ

た。花束は各自が自分のを束ねたものか、花の種類も束ね方もまちまちで、その素朴さが嬉しかった。その後も各地でこのような花束の歓迎を受けた。アゼルバイジャンのお嬢さん方には目の大きい、明るい美人が多かった。

一般旅行者は行くことができない遠くまで行くので、バスには常にパトカーの先導がつく。れわれを保護するためのものであって、監視するためのものではなかったようである。バク近くを走ったときなど、行き交う車が比較的多いところでは、その車を止めてわれわれのバスは進む。このような大名行列をしたことのない一同は、向うから来る車が道の傍に停止する毎に大声をあげて喜ぶ。

オフィオライトの見学と討論はまことに有益であった。しかし此処でのオフィオライトが海洋地殻であったかどうかの結論は得られなかった。これから先も各国で研究を進めなければならない、むずかしいしかし重要な問題であるというのが一同の感想であった。キジルクム沙漠の中のタムジタウの山中で、海洋地殻が大陸地殻の上に乗っかるときにできたという大デッケン構造を一望のもとに見たときには、自然の壮大さをしみじみ感じ

た。

私にとってなじみの薄い乾燥地域の地形を見ることができたのも大きな収穫であった。雨の少ないフェルガナ地方では、南天山山脈のわずかの雨を集めて山麓に流れ出る水を利用して盆地は沃野となっている。しかし天山の前山地帯はまるで沙漠である。この半沙漠をすぐ南にひかえながら、街には一かかえもある鈴かけの並木が青々としている。街路樹の列の根元には溝が掘られ水が流されている。道の真中に影を落すほどの街路樹はこの地域の長い歴史を示している。サマルカンドでは早朝にモスクの前庭のバラに重いバケツの水を運ぶ 10 才ぐらいの少年を見た。半沙漠地の緑はここに住む人達の憩いであるが、それはこのようにして守られている。

サマルカンド、ブハラ、ヒーバなどの古都市はゼラフシャン河またはアムダリア河といった大河によってうらおっている。サマルカンドからヒーバの北東にあるウルゲンチまで飛行機で飛ぶと、ゼラフシャン河周辺の広い沃地は北西に向って狭くなる。やがてその支流の上を飛ぶ。ここでは耕地は川の両側の猫の額ほどのはんに止

まる。やがて涸れた川のメアンダーが続き、これも砂丘に埋もれる。やがて地平線に黒い一すじの帯が見えてくる。アムダリア河である。アムダリア河ではほとんどその右岸にまで砂丘の列がせまり、砂丘と河との間にわずかの人家が散見される。これに対して左岸にはアムダリアの濁流をとり入れた運河がいくつか走り、広大な沃野を作っている。始めは褐色に濁った水も、運河の中ではやがて澄んで、青いすじとして平野の中に消える。かんがい重要な此処では畑は水田のようにあぜで区切られている。一枚の“田”の中にも狭い溝が平行にいくすじも掘られている。飛行機の上で水田と見えたものは、実はこのように作られた綿畑であった。

この綿畑がずっと続いたあとに着いたヒーバには、日干しの泥れんがの城壁に囲まれた小都市が残されている。華麗なタイル張りのいくつかのモスクの他に、多数の小さい、四角い泥作りの小屋の白壁が続く。数百年前そのままの小都市である。私はこの旅行で、東洋と西洋とのかつての接点であったこの地域で、もっと古い時代の大洋地殻と大陸地殻との出会いを見たわけである。

私の読んだ本 (3)

森 類 著

「鷗外の子供たち」(光文社、1956年初版)

吉 野 誠 治 (中央)

先号のこの欄の筆者が「読み終えたあとでもう一度、ページを繰り直して後味を楽しむ、といった本にはなかなか出くわさないものである。」と書いておられたが、全く同感である。私なども比較的多方面の本を乱読しているものでも、何度でもくりかえして読みたいという本は極く少ない。そうしたなかでこの「鷗外の子供たち」は私にとって実に楽しいよみものではあった。

文豪森 鷗外とゆう人が、家にあってはどんな夫であり、父であったか。この書は父鷗外から、他のきょうだいの誰よりもかわいがられて育った末っ子の類氏が語る父ならびにその家族のことどもである。序章を一寸ぬきがきしてみると、——森家は島根県津和野町から上京した町医者で、父(鷗外)をえらくするためには、寒くてもひもじくても結束して事にあたってきた一族である。すべて「感心」の二字からできあがっていて、祖父母をはじめ、みな、修身の本から「こんにちは」といって顔を出してもいい人物で構成されていた。母は嫁にきて姓

は森になったけれども、「感心」からは縁遠い人物なので、いっしょに住みながらひとり遊離していた。ひとり別にいながら別でないような気がしたのは、父の人物が大きいため、修身の本にはいきりきれず、ぬけ出てきて母を愛してくれたからである〔中略〕本家では、類の文章を偉い人がほめてくれても、内輪のごたごたを暴露した、みっともないものであることに変わりはないと言っている。みっともよくするために書いているのではないから、みっともない個所があるかも知れないが、自分が感じたままを正直に書いたものである。あたしたちを一人ずつまな板の上に連れてきて好きなように料理されてはたまらないと、二人の姉からも毛虫のように忌みきらわれ、今は会うことも許されなくなっている。——とある。

この書の初版は 10 数年前のことで、私自身当時はごくざらりと読み過してきたのであるが、昨年あたりから、鷗外関係の研究書、評論、全集などが各種にわたっ

て発行されたことと、同家の御家族の方々にもお目にかかってお話をする機会をもつようになって、更めて読みかえして感銘を深くした次第である。

父が頼氏 11 才のときに病死され、当初は家計にひびくこともなく一応安住した生活をつづけていたのが、敗戦によってふりまわされるまでの経過が漱石の「坊ちゃん」を思わせる名文で生き生きと、そしてその中に肉親

阿部 優 蔵 著

「東京の小芝居」(演劇出版社, 1970)

この本の著者は現に明治生命保険会社の課長であり、水上瀧太郎氏の御令息でもある。水上氏が同社の重役のかたわら文筆にたずさわって立派なお仕事をなさされたように、この方も会社の業務のかたわら、しかも、40 代の若さでこれだけのものをまとめられた御努力に対しては、心から敬意を表したい。

明治、大正と庶民の人気にささえられてきたいわゆる小芝居(大劇場に対して三流どころの芝居をいう)も大正 12 年の震災を境にして急激に衰えてしまい、戦後にいたっては「かたばみ座」の一角がわずかにそのふん囲気のある程度残していたが、それとてもはや見ること

に対してのそこはかとなき愛情をこめて克明にえがき出されている。特に世間からはとかく悪妻のごとくにいわれがちな母についても懸命に弁護しておられるのは大へん気が良い。

鷗外の研究者の方にも愛読者の方にも是非おすすめしたい本である。

ができない。

この本はそうした小芝居について実に根気よくまた丹念ににコツコツと調べあげたものである。そのなかには観客と俳優とが一緒に楽しんできた今はなき小芝居への郷愁といったものがにじみでている。

こうした地味な仕事はむくいられることは少ないが、今のうちに誰かが手をつけなければ、ますます調査が困難になってゆくものである。巻末にかかげてある「劇場梗概」も貴重な調書といえる。なお著者はこの著によって昨年度の芸術祭新人賞を授与されたことを付記しておく。

「源氏物語」(コロンビアレコード: JX 29)

山口 嘉 夫 (物理)

これ書評ではなく、源氏物語のレコード(夕顔・須磨よりの抜萃朗読)についての所感である。

百聞は一見にしかずという。同様に、本や写真で見て想像したギリシヤ彫刻やアクロポリスは、実物を見るにおよんで、両者の懸隔の大きいのに一驚する。古代日本語に八母音があり、母音調和があったと聞かされ、ローマ字綴りの古事記(東大出版会よりでている和英対訳)をみて、 $h=pa$, $\tau=tu$, $tü$ 等をなるほどと思っても、その実際の音読を試みたことはなかった。今回、友人の友人(物理, 上村研の金久 誠君)から標記のレコードをかりて聞いて、たまげてしまった。頃は平安後期の音の復原を試みたものであるから八母音は失なわれているが、 wi , wo を i , o から判然と区別し、 sa , si , su , she , so ; ta , ti , tu , te , to ; ϕa , ϕi , ... 等(nando)と旧カナのとおりを読むのである。アクセントも資料にも

とづき勘考し、漢語は中国式に忠実であろうとしている。文のイントネーションの推定をどうしたかだけは最も問題のある所で眉に唾をつけたくなる。

この朗読を聞いて、昔国語で習い、また目で文字を追って読んだものとの違いにおどろいた。室町期の日本語は能・狂言や日ボ辞典にその面影をしのべよう——それと平安期の日本語の間の大きな変化は歴史の歯車の速かな回転を反映しているのではあろう。

監修した国語学者によれば、専門家の間では異論のありうる復原であるとか。さもあろう、しかしこのレコードは国語・古文についての頭の中の像を抜本的に拡大してくれた。大した試みである。欲をいえば、レコードの出現が余りにも遅すぎたというべきか、古代の生活の復元は、絵にフィルムにと多機に試みられてきたのに、「音」の復元は大そう遅れていたと思われる。

古くより伝わる祭の詞や歌の音韻と、言語学的に近接したセム系のいきた言語をもとに、イスラエルは古代ユダヤの言葉を常用語として復活させた。ヨーロッパの先進国でも古い音韻の発唱を復元している(ラテン,ギリシヤの言葉はもとより例えばシェークスピアやチャーサー

の時代の英語)。門外漢として、国語学者の先生たちに、次は古事記や万葉集の奈良朝(またはそれ以前)の音韻に則った朗読をレコード化してくれるよう要望したい。

こんなに面白い源氏物語のレコードを長い間借してくれた物理・上村研の金久君に感謝する。

私の提案(2)

学術情報の求め方について

藤原 鎮 男 (化学)

(1) わが国の国立大学教官が図書館に何を望むかというアンケートに対する回答結果の集計によると、理学系教官についてみた意見分布は第1表のようである。

第1表 理学系大学教官は図書館にどのようなサービスを望むか

| | |
|-----------------------------------|-----|
| イ. 新着図書雑誌リストを作製, 配布 | 6% |
| ロ. コンテンツサービス | 10% |
| ハ. 他機関から文献をとりよせてくれるサービス | 28% |
| ニ. 学術論文の索引を所属機関内で作製配布 | 4% |
| ホ. 題名や著作者名のわかっている文献の所在を明らかにするサービス | 9% |
| ヘ. 知りたいと思う事項について必要な文献を探してくれるサービス | 17% |
| ト. 文献情報の迅速組織的な検索サービス | 14% |
| チ. 外国図書雑誌を航空便でとりよせてくれるサービス | 12% |

この結果において最高の値を示すのは(ハ)で、それは、教官にとって、ほしいけれどもすぐ手近に見られない文献があるという事実と、それを充足する何らかのサービスメディアを必要とすることを示している。

ところで第1の事実が意味する内容は少し複雑である。まずある人はそれだから手近に文献を置くシステム、すなわち図書室の細分化が必要必然であるとするかもしれない。ただしかしそれは図書の有効利用からも、費用の上からも、そして実際にその世話をする人手の上からも、この方向への志向は到底許されない。そこで問題はあとのこと、すなわち、どのようなサービスシステムをつくれればよいのかということになる。これについては(3)でのべる。

さてアンケートに立ち戻ると、つぎに高率なのは(ヘ)

である。これは前の要求と少し性質がちがいが、前者がいわば焦点の定まった要求に対する図書館の応答を問題にしているのに対し、後者は顧客の注文も漠然としていて図書館の側も、そのインタレストパターンにどう応答するか準備してかからねばならぬ種類のことなのである。そして、問題はそのような需要が相当多いということ、それに答えるすべがどうやら未完成であるというところにある。結論的にいうと、自然科学の分野ではケミカルアブストラクツ(CA), バイオロジカルアブストラクツ(BA), フィジカルアブストラクツ(PA), メドラーズ(MEDLARS)などという二次情報誌が相当整備されて来たのでそれを個々の研究者が自己のインタレストパターンにいかにして対応させて利用するか、その方式、手順を整えること(ソソーラス)が必要であり、さらに研究室にいる研究者個人と上述の情報源とを結ぶネットワークを早急につくらねばならない。筆者は国井利泰氏(情報科学研究施設助教授)、山本毅雄氏(大型計算機センター助教授)などとこの二つのことを数年来実験試行して来た²⁾。この小論を執筆することになったのは編集者がそれを聞きつたえられて、関連する問題の所在を紹介せよといわれたからである。幸い化学教室では本年度から試行的な情報供給のネットワークづくりを始めうるに至ったので、この機会にそれについてもあとで少し述べさせて頂こうと思う。

(2) いわゆる文献情報の必要性はどのように認識されているか。研究者にとって文献情報を必要とするのは当たり前と考えられるかもしれないが人々の実際の対応は必ずしもそうでない。

他分野のことはよく分らぬが、物理学は二次情報誌を昨年までつくらなかった。それは、人の思索の粕をなめるのは無駄であり、創意はわが胸中にのみ求めればよい

とするのがその一つの理由であったかも知れぬし、また最新かつ最も価値ある情報はロコミと実見(実験)にありとするのもう一つの理由であり、さらに実際的かつ有力なもう一つの理由は、化学が CA を 1906 年から刊行し、核や物理のかかなりの部分まで包含集載しているので、それに依存すればよいとされたのかも知れない。しかし、その物理学もアメリカ物理学会が 1972 年以来 PA を刊行するに至った。それが一旦刊行開始となると以後の文献情報の機械処理の見事さは瞠目事である。何がこの変身のモチーフになったかという、とにかく文献情報の数がふえたので、学術誌を刊行し、またその要旨を編集した二次情報誌をつくるだけでは学会の機能は不十分であって、二次情報誌の内容を、表題、著者、要旨中の主要なキーワードにもとづいて再編集し、機械検索でそれらを研究者のインタレストパターンに即した利用者側からの要求に応じうるようにする、そういう必要が認識され、そしてそれがまた実際に行ない得るまでに計算機科学が発達したためであると思える。

図書館は従来集書の機能を第 1 とし、最新の学術情報の供給はやや二義的に扱かれた嫌いがある。太平洋戦争までは理学部はとくにその傾向があり、そのために図書室の内容は、情報源の供給者としては取り扱われてもやや任意的な方針で運営されてきたように思う。たとえば、物理教室は参考書など単行本をよく揃えておられたが化学教室は図書費より実験費に、そして単行本より雑誌に重点を置く方針がとられて来た。ところが、図書室が教室ごとに分れ、その機能なりあり方について抜本的な検討がなされないまま、世は学術情報の洪水の時代となり、人手からも、費用からも、そして論文の数からもわれわれ研究者をめぐる学術情報流通の社会は大げさに言うと破局的な行きずまりに当面することになった。悪いことに研究者は非常に狭い自分の専門分野に関する限りは十分国内国外を通じて情勢を把握し(それも実はあぶないことになりつつあろう)、また零細生産者であるので糊口をすすぐ程度にはどうやらやってゆけるので問題の重要性が認識されず、したがってまた対策を考える声が研究者から仲々起らない。

このことはいろいろの意味で重要な影響を及ぼすことである。第一には、若い研究者や学生が広い視野をもつのに不都合であろう。第二に今日の学問は多くの専門がまじり対象も手法も多様であるとはいえ実は相互協力の場が多いので学術情報のカレントアウェアネスが十分になされているかいないかは大問題である。さらに重要なのはすでに米国、英国、ドイツその他が計算機を媒体にしてテープ化した学術二次情報を利用するネットワーク

を整備し始めていることであり、われわれはそういう事態からずっと後方にいるということである。そこで問題は二つに分れるのであって、学術情報源を一方では機能的に集約すること、そして他方では個々の研究者に必要な情報を供給するネットワークを作らねばならぬことになる。

最近学振により招かれわが国の学術情報システムの視察を行なった英国図書館学のハンフリー教授は離日に当たっての感想として、「日本の大学の至るところにケミカルアブストラクトが購入され、そして購入雑誌および図書を全体として見るとき、世界の全刊行物の種類のなかからいって、日本に所在するものの種類がきわめて限られているのに驚いた」といっておられた。

ノースカロライナ州のトライアングル研究団地は 100 km×50 km くらいの三角形の頂点に三つの大学がありその中に 25 のノンプロフィットの官公私立研究所が所在するものであるが、ここでは各研究所、大学の全メンバーは重複のない限り無制限に図書の購入を申告し、購入された図書は各研究所に置くことは許されず、すべて三大学の図書館におかれ、これを必要とする人には巡回バスが 1 日 2 回巡回して届けるシステムを採って、これによって学術情報の偏りのない充実を期している。

(3) 必要とする文献情報はどうやって得られるか。

専門の人が自分のために学術情報を得ることはここでは問題外とする。ここでは他分野のこと、あるいは専門家への道をさがしつつある若手のためのことである。これらの人は毎日図書室にゆき学術誌をめくり、CA、PA などの二次情報誌の適当な項目をさぐり、また化学でいうケミカルタイトルズ(CT)などをめぐるであろう。実はこの過程は教育的に非常に重要で個人個人にインタレストパターンができ、また必要な知識を検索するシソーラスが暗々裡に育まれるのである。残念ながら機械的検索が徹底し、また先のトライアングルリサーチのようになると、このような教育効果の大きい過程は失われる恐れがある。

それは暫くおくとし、今の論点についてのみ述べると、化学の論文で CA に記載される件数は 1973 年度は 30 万件と予測され、その一つ一つは学術誌が出て約 13 週で CA に登載される。わが国の現状はその CA が船便で送られ図書室の棚に出るまでに手順があるのでさらに 1 月半か 2 月かかり、したがって原論文が出てから 20 週ちかくたって二次情報誌をみることになるのである。

よほどの人でないと広範囲、不特定に一次文献誌を渉猟することは今はなされぬであろう。そうだとするとこの 20 週の間研究の重複なり有効な発表があったりし

第2表 1972年度 NMR 関連文献検索例

| | | | |
|-------------------------|----------|---|-----------|
| Chemical Titles (CT) | 2,746 報文 | { CT のみにあるもの CT, CA 共通に見出されるもの CA のみにあるもの | 498 報 A |
| Chemical Abstracts (CA) | 3,472 報文 | | 2,248 報 B |
| | | | 1,224 報 C |

たら大変困ったことになる。また、それ程でなくても毎日有為の仕事盛りの人が図書室に釘づけに数時間費さざるを得ないというのも望ましくない。もう一つ重要なことは現実に行なわれている検索の精度である。

多くの人は検索を論文のタイトルで行なう。化学ではタイトルだけなら数週間でCTとしてわれわれの目にふれる。しかしそれだけではいかに不完全であるかは、つぎの例でも推察願えるであろう。

最近、当研究室において、山崎 昶博士の手により、NMR 関連文献のCTとCA双方による検索の検討が行なわれた。NMRは現在では化学の研究において必須の測定手段であるから、副次的に測定を行なったとか、同定のために用いたというようなものは含めていない。(このような目的にはIndex Chemicusを見るとよい。)1972年一カ年分について、内訳を第2表に掲げる。

CTの対象誌は約700誌であるから、CAの採録件数の方がCTによるものより多いのは当然であるが、詳しくみると、CTによる採録例がすべてCAに採録されているのではないことがわかる。

CTにのみ採録されているもの(第2表中のA)があらわれる原因は、CAの索引システムが抄録本文のみを対象としているためである。近年、著者抄録がそのまま掲載される例が増加してきたが、多くはタイトルと抄録(シノプシス)本文が重複しないように書かれているため(以前はそのようにシノプシスを書くように指導されていた)である。

CAにのみあってCTにふくまれないもの(第2表C)は、対象となる雑誌の数のせいもある(たとえば学位論文とか特許などがこれに入る)が、CT検索から脱落する主要な原因は表題のつけ方に問題があるのである。最近では雑誌自体が分化して、NMRなり、赤外な

り、クロマトグラフィーなりの部門別の専門誌が刊行されるようになってきた。すると、たとえばNMRの専門誌においては、いちいちタイトルにNMRを唱う必要がなくなって、研究対象となる化合物名や、特定の現象名のみが表題となってしまう。これが二次情報誌に編集される時、CTのようにタイトル内のキーワードだけで分けられると、化合物や現象の方に区分されてしまうのである。たまたま後者を熟知していればよいが、普通は検索者はそうでない場合が多いから、結果として検索の網の目から洩れてしまうことになる。

このような時点では、キメの細かいシソーラスを、研究者別に、あるいはグループ別に用意して、機械検索のネットワークにのせることが必要である。われわれは、時間と労力を要することではあるが、段々にそれを進めねばならない。個人からグループへ、それから教室単位、学部単位にインタレストパターンにもつづいたキーワードのシソーラスをつくり、CAやPAなどのデータベースから必要な文献情報をサブファイルの形で蓄積しておく、必要に応じていつでもそれを呼び出せるようにする。そのようなキーワード表作製と、大容量計算機と研究者を結ぶネットワークを含め新しい形の図書館の機能をつくってゆこうというのが、先にのべたわれわれのプログラムである。大方の御関心、御示教を得ることができれば幸せである。

注

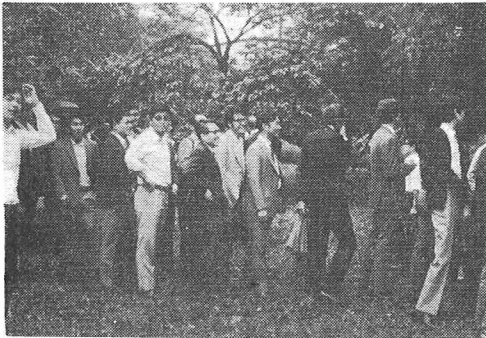
- 1) 文部省情報図書館課調査(昭47)。
- 2) 特定研究科研費による。この研究は東大大型計算機センターの各位、とくに当時の高橋秀俊所長のほかセンターの企画係の諸氏、とくに梅沢友子、池田親民、仲野憲一、牛丸 守、済賀宣昭、染谷隆雄氏らの多大の御協力により行なわれた。

6 月理学会合日誌

- 11 日 (月) 14:00~16:50 理学系研究科委員会
13 日 (水) 15:00~17:00 人事委員会
15:00~17:30 教務委員会
15 日 (金) 16:00~17:00 主任会議
18 日 (月) 12:30~14:30 学部長と理職の定例交渉
20 日 (水) 14:00~18:30 教授会
25 日 (月) 13:20~17:45 学部長と学部自治会の会見

理学部職員学生懇親会の開催

6月6日(水)恒例のビア・パーティが小石川植物園で午後3時から開かれた。あいにくの雨模様であったが、外国人研究員などもふくめ、多数の教官・職員・学生が参集し、生ビールの列は、おひらきの5時頃までつづいた。戦時下、戦後の食糧難もしらない学生諸君が、青木昆陽先生の甘藷の碑を珍らしげにながめているのもユーモラスであった。



教授会メモ

6月20日(水) 定例教授会
理学部四号館会議室

議事に先だち上田一夫教授(動物)の“サケの廻遊”と題する講演が1時から行なわれ、活発な質疑をともしない2時15分終了した(広報次号に掲載予定)。ひきつづき新任の村上彰助教授(動物)が学部長から紹介された。議事は6時頃終了した。

議事

1. 前回議事録の承認
2. 人事移動等の報告(別紙参照)
3. 研究生の期間延長について
研究生3名の期間延長を承認したあと部長より下

記の件の紹介があった: 従来日本学術振興会奨励研究員になった者も、研究生になると学費を支払っていたが、このたび新しく研究員の制度ができ、それに該当することになるので、学費は徴収しないことになった。この規則は、48年6月19日から施行し、同年4月1日から適用する。

4. 昭和48年度受託研究員の受入報告
5. 雑件
イ. 教育学部より依頼の教科教育法非常勤講師選考委員会委員は、和田(昭)、下郡山両教授に依頼した。
ロ. 全学学生委員は、佐藤(正)委員は7月で交替するが、後任は学部長一任。
ハ. 東大百年記念事業の企画委員会が新設されることにより、理学部よりの委員は学部長一任。
ニ. 49年度の進学振分についての連絡事項。
ホ. 臨時カリキュラム委員会の件(霜田)
特に全学セミナーへの理学部教官の出講数を増やすことへの希望が表明された。
6. 教職免許教科に関する理学部、専門科目の単位決定について(竹内)
7. 人事委員会報告(寺山)
臨職問題および特別昇給の件の報告があった。
8. 教務委員会報告(飯田)
学部自治会のなかでできたカリキュラム委員会との会見について報告があった。
9. 宇宙線観測所の件
宇宙線観測所運営委員会委員の佐々木(亘)教授より、最近の同所をめぐる情勢について報告があった。
10. 建物の件
学部長より、前回教授会よりの宿題であった化学教室の考え方がきまり、理学部としては新しく建てられる5号館には、数学、地質、鉱物が入り、化学は現在位置において改築をするという基本方針の説明があった。関係教室はいずれも学部長の提案に意義なく、理学部としては中央のマスター・プラン委員会での決定をまってこの方針でゆくことを了承した。
11. 会計委員会報告(田丸)
主として情報科学に関する学生経費について説明があった。
12. 総合計画委員会報告
49年度概算要求の基本方針およびその内容について学部長より説明があった。

予備交渉で合意された議題は下の如くである。

1. 地質鉱物学科実習費の問題
2. 学生カリキュラム委員会公認の件
3. 大学院問題
4. 一号館戸締りの件
5. 理学部新館の件

この他自治会は予備交渉で議題とされなかった次の二つの問題を議題にするように要求した。

筑波大学、山本岡本両氏の立入禁止以上の諸問題。理学部長の答弁は以下の如くであった。

1. 実習費の問題については自治会より概算要求にくみ入れることならびに6月の野外派遣には東京よりのバスチャーターを実現することを要求した。これに対し学部長は概算要求にはくみ入れること、バスチャーターについては目下努力中であること、しかし努力の内容は現在のところ明らかには出来ないむねの答弁があった。
2. 学生カリキュラム委員会については学部長より公認はしない、しかし相互の意志を十分よく通じあうことは望ましい。いわゆる自主ゼミの内で学科で単位としてみとめられているものに補助を望むならば、学科に申し出て、その学科の判断にゆだねるのがよいと思うむねの答弁があった。
3. 大学院問題については自治会側の申し入れは認めることが出来ないむね学部長よりの答弁があった。
4. 一号館の戸締りについては学部学生が8時以後まで居なければならぬ理由は少ないこと、自治会委員には総計2ヶの鍵を学生委員の管理責任のもとに貸与出来るむね学部長よりの答弁があった。
5. 理学部新館については学部長より具体的かつ詳細な経過の説明が行なわれ、理学部としては新館には

数学教室地質学教室鉱物学教室を収容したい旨考えられていることを明らかにした。

なお議題外の問題については、筑波大学については反対の声明を出す意志のないこと、また立入禁止については、この措置は総長の管理権にもとづいてとられたものであること、その事由についてはさらによく調べてからいずれ説明するむね学部長の答弁があった。

おしらせ

昭和49年度

東京大学大学院理学系研究科修士課程学生募集要項 (抜萃)

1. 出願期間 8月20日(月)~9月1日(土)
2. 試験期日 (1) 第1次試験(外国語, 一般教育科目) 9月18日(火)
(2) 第2次試験(専門科目) 9月22日(土)~28日(金)
この期間内に各専門課程で定めた期日に実施する。
3. 合格者の発表 (1) 第1次試験 9月22日(土)
(2) 第2次試験 10月2日(火)

備考

1. 出願資格, 試験科目, 収容予定人員また出願手続等詳細は, 修士課程学生募集要項を参照のこと。(各教室に配布済み)
2. 募集要項, 入学願書等関係書類は, 6月1日(金)から配布されますから, 希望者は理学系研究科事務部(理学部大学院掛)に請求のこと。

昭和48年度科学研究費助成金採択一覧

| 研究種目 | 氏名 | 研究題目 | 昭和48年度配分額 千円 |
|------------|--------|--------------------------|-----------------|
| がん特別研究(1) | 寺山 宏 | 細胞膜における癌性変化の本質とその生物学的意義 | 6,000 |
| 自然災害 " (1) | 永田 武 | 地殻歪に伴なう電磁気効果による地震予知の研究 | 1,200 |
| " (2) | 飯島 東 | 地すべりの成因的分類 | 600 |
| 特定研究(1) | 門司 正三 | 植物による汚染環境の改善機能に関する基礎的研究 | 8,200 |
| | 浜口 博 | 新銅元素の地表付近における行動に関する化学的研究 | 4,000 |
| | 宮沢 辰雄 | タンパク質機能のモデル系の合成と構造解析 | 1,800 |
| | 藤原 鎮男 | 化学における情報処理 | 24,000 |
| | 岸保 勘三郎 | 気象研究における情報処理 | 5,000 |

| | | | | |
|---------|-----|--------|--|--|
| | | 高橋 秀俊 | 感覚情報の脳内処理機序の研究 | 12,500 |
| | (2) | 木原 太郎 | 研究用トーラス | 19,000 |
| 特別研究(2) | | 和田 昭允 | ポリーおよびオリゴヌクレオチドの相互作用 | 2,090 |
| " | 継続 | 定永 両一 | 相転移に伴う結晶成長 | 3,640 |
| 一般研究(A) | | 江上 信雄 | 生殖細胞の放射線高感受性の解析 | 昭48 13,000 昭49 1,250 |
| " | 継続 | 宮沢 辰雄 | 生物光化学反応系の構造化学 | 6,070 |
| | | 飯野 徹雄 | 細菌べん毛の遺伝学的研究 | 2,150 |
| " | (B) | 小平 邦彦 | 解析多様体及び代数多様体の研究 | 昭48 2,500 昭49 2,000 |
| | | 霜田 光一 | 色素レーザーによる高分解能分光 | 6,500 |
| | | 黒田 晴雄 | 高分解能高感度 ESCA 分光器の開発 | 昭48 3,300 昭49 600 |
| | | 稲本 直樹 | 双極性有機リン化合物の反応に関する研究 | 昭48 4,400 昭49 1,500 |
| | | 斎藤 信房 | メスbauer分光法による無機化学反応の研究 | 昭48 6,400 昭49 1,600 |
| | | 上田 一夫 | サケ類母川回帰の感覚生理学研究 | 昭48 2,000 昭49 1,000 |
| | | 岡田 吉美 | ウイルス粒子形態形成反応の分子生物学的研究 | 昭48 5,100 昭49 3,000 |
| 一般研究(B) | | 中川 一朗 | 遷移金属を含む結晶の格子振動と結合性に関する分光学的研究 | 昭48 6,300 昭49 2,800 昭48.4.1 東北大 |
| " | 継続 | 鈴木 秀次 | 量子固体の塑性変形 | 500 |
| | | 徳丸 克己 | 光一重項増感反応による遊離基発生の研究 | 450 |
| | | 小林 英司 | 視床下部脳下垂体情報伝達系の研究 | 2,880 |
| | | 飯島 東 | 本邦新生代の火山岩、火砕岩およびそれに伴う鉱床の中の微量元素の研究 | 500 |
| | | 藤田 宏 | 発展方程式とその近似解法 | 640 |
| | | 海野 和三郎 | 天体における磁場の形状と流体力学的構造 | 900 |
| | | 天埜 堯義 | レーザー分光によるフリーラジカルの研究 | 900 |
| | | 平川 浩正 | 重力波と地震波の相関 | 1,360 |
| | | 永田 武 | 月岩石の磁氣的性質 | 1,500 |
| | | 小嶋 稔 | $^{39}\text{Ar}-^{40}\text{Ar}$ 年代測定に基づいた海底地殻年代の推定 | 800 |
| | | 佐藤 良輔 | Near-field に於ける地震波の研究 | 8,000 |
| 一般研究(C) | | 吉田 耕造 | 海流変動の力学的機構 | 1,000 |
| | | 福島 直 | 電離層および磁気圏にわたる三次元電流分布の研究 | 1,500 |
| | | 朽津 耕三 | 準安定励起原子と気体分子の衝突による動的過程の研究 | 1,100 |
| | | 脇田 宏 | 揮発性微量元素の地球化学的研究 | 1,060 |
| | | 村田 紀夫 | 光合成初期過程の蛍光および遅延発光の解析による研究 | 1,120 |
| | | 水野 丈夫 | 胚器官分化における組織間情報伝達機構の解明 | 1,170 |
| | | 高橋 景一 | 繊毛による刺激受容の機構 | 1,120 |
| | | 花井 哲郎 | 後期中性代以降の日本列島の古地理変化 | 1,140 |
| | | 川島 誠一郎 | 幼児期におけるステロイド処理とプロラクチン分泌 | 710 |
| | | 定永 両一 | 鉱物結晶の相転移の研究 | 930 |
| | | 阪口 豊 | 変動帯地形の比較研究 | 1,490 |

| | | | | | |
|---------|---------|---|---|------------------------------------|-----|
| 一般研究(D) | 継続 | 竹内 均 | 測地学的方法による地球内部構造の研究 | 900 | |
| | | 堀 源一郎 | 非保存系摂動論の応用 | 300 | |
| | | 水島 公一 | 金属的伝導を示す非磁性遷移金属酸化物中の不純物磁気モーメント | 300 | |
| | | 藤井 直之 | 高温における微小造岩鉱物の熱定数の測定 | 350 | |
| | | 金田 栄祐 | 昼測地磁気中性点下におけるオーロラ嵐発生条件の研究 | 300 | |
| | | 原田 一誠 | 分子結晶の振動スペクトルの解析による分子間相互作用の研究 | 320 | |
| | | 高橋 健治 | 微生物起源のリボスクレーアーゼおよび酸性プロテイナーゼの構造と機能の比較生化学的研究 | 380 | |
| | | 三好 泰博 | 光形態形成反応におけるフィトクロムの作用機作と生体膜電位 | 350 | |
| | | 駒 嶺 穆 | 植物におけるカルス形式の代謝生理学的研究 | 260 | |
| | | 和田 正三 | ホウラインダ原系体細胞における分裂方向の制御機構について | 270 | |
| | | 館 鄰 | 脱落膜腫形成誘発に対するネズミ子宮内膜に感受性とホルモン依存性子宮内DNA合成との関連について | 270 | |
| | | 佐藤 正 | 地質構造生成時の物理条件推定に関する研究 | 360 | |
| | | 平井 直樹 | 培養細胞の雑種形成による霊長類の染色体研究 | 昭48.7.1 260 科学技術庁放射線 医学総合研究所 | |
| | 奨励研究(A) | | 杉村 新 | 羽越地域の活褶曲 | 300 |
| | | | 榎本 彦衛 | 置換群の原始拡大に関する研究 | 380 |
| | | 福原 真二 | 四次元多様体の位相的特質 | 300 | |
| | | 水谷 仁 | 超高压下での弾性波の速度の測定 | 350 | |
| | | 山本 学 | 炭素-炭素単結合の回転阻害に由来する異性体の分離 | 280 | |
| | | 森山 祥彦 | トリテルペンの転位反応の研究 | 昭48.7.1 280 在外研究フランス | |
| | | 今村 峯雄 | 宇宙線生成放射性核種による一次宇宙線強度の経年変化に関する研究 | 270 | |
| | | 竹田 満洲雄 | ^{57}Co 標識化合物において EC 壊変により成生する ^{57}Fe の化学的状態のメスbauer分光法による研究 | 昭48.9.1 280 在外研究英国 | |
| | | 宮本 健 | 白金-水素結合の性質 | 280 | |
| | | 渡部 徳子 | γ 線照射による金属錯体の酸化還元反応機構の研究 | 昭48.3.31 270 財団法人分析化学 研究所 | |
| | | 小林 昭子 | 遷移金属ヒドリドならびにヒドロボレート錯体のX線による電子密度 | 280 | |
| | | 山下 貴司 | 海水産顕花植物の比較発生学 | 360 | |
| | | 土屋 禎三 | 纖毛反応のイオン機構 | 220 | |
| | | 馬場 昭次 | 纖毛運動の素過程に関する研究 | 220 | |
| | | 井内 一郎 | ニジマスの発生過程における赤血球産生転換機構に関する研究〔I〕幼生型及び成体型ヘモグロビン又は赤血球膜の特異的抗体の作製 | 493 | |
| | 小林 浩士 | 損傷により誘起される表皮細胞の分裂制御機構 | 260 | | |
| | 嶋 昭紘 | 動物肝臓細胞核 DNA とミトコンドリア DNA の放射線感受性の比較研究—特に動物のエイジによる変動について | 300 | | |
| | 朝野 洋一 | 南西ドイツ農村部における小地域中心地の研究 | 300 | | |
| 試験研究(1) | | 森田 茂広 | マイクロ秒領域での生物現象の解析法の開発 | 3,000 | |

| | | | | |
|---------|------|---|-------------------|-------------------------|
| | 古谷雅樹 | 二波長測光法による顕微分光装置の開発 | | 900 |
| (2) | 浅田敏 | 自動浮上方式に適した海底地震計本体の試作及び研究 | | 1,850 |
| | 島内武彦 | He-CL レーザーラマン分光計の試作研究 | | 1,600 |
| 総合研究(A) | 田村一郎 | 多様体の位相幾何学的研究 | 昭48 昭49 | 2,390 2,400 |
| | 木村俊房 | 解析学 | | 3,220 |
| | 飯田修一 | 遷移金属化合物とくに酸化物の電子構造と物性 | | 2,800 |
| | 田丸謙二 | 反応デザインの基礎 | 昭48 昭49 昭50 | 4,900 3,500 3,500 |
| | 浜口博 | 環境物質及び人体中微量元素のバックグラウンド存在量の放射化分析による測定 | | 1,890 |
| | 山崎敬 | 東アジア産植物の系統分類学的研究 | | 2,630 |
| | 小林英司 | 情報伝達機構としての内分泌系の特性 | | 2,780 |
| | 渡辺直経 | 適応現象としての発育遅滞に関する研究 | | 1,900 |
| | 埴原和郎 | 人類集団の数値分類に関する基礎的研究 | | 2,100 |
| | 江上信雄 | 放射線障害の体液性因子による修飾に関する研究 | | 2,000 |
| | 森田茂広 | 光合成器官の生理機能とその制御機構に関する研究 | | 2,500 |
| | 島内武彦 | 生体物質系のラマン効果の研究 | | 3,700 |
| 継続 | 二宮敏行 | 転位の動力学 | | 2,500 |
| | 藤井忠男 | 加速器による素粒子物理の実験研究 | 昭48 昭49 | 2,200 2,200 |
| 総合研究(B) | 立見辰雄 | 国際地質対比計画 International Geological Correlation Programme IGCP 準備のための研究連絡 | | 860 |

○理学部紀要最新号の内容紹介

[Section III Botany Vol. XI, Nos. 5~7]

T. Yamashita: Über die Embryo- und Wurzelentwicklung bei *Zostera Japonica* Aschers. et Graebn.
I. Hurusawa: Taxonomische Untersuchung der Gattung *Cotoneaster* (Rosaceen) auf Karpologischer Grundlage.

I. Furuhashi and M. Monsi: An Analytical Study on the Ecophysiological Adaptation of Soybean Plants to Limited Water Supply.

[Section IA Mathematics Vol. 20, No. 1]

Hikoe Enomoto: Characterization of families of finite permutation groups by the subdegrees. II.

Takashi Harase: On the index-period problem for algebraic curves and abelian varieties.

Hirofumi Matsue: Fibering over a circle and its application.

Hikosaburo Kamatsu: Ultradistributions, I. Structure theorems and a characterization.

Hikosaburo Komatsu: On the regularity of hyperfunction solutions of linear ordinary differential equations with real analytic coefficients.

Young Sik Park and Mitsuo Morimoto: Fourier ultra-hyperfunction in the Euclidean n -space.

Masao Keike: Congruences between modular forms and functions and applications to the conjecture of Atkin.

Kisao Takeuchi: Subgroups of the modular group.

Teruo Ushijima: Correction to "On the generation and smoothness of semi-groups of linear operators" in this Journal Vol. 19, pp. 65~127.

[Section V Anthropology Vol. IV, Pt. 3]

Morihiko Okada: Effect of Muscle Length on Isometric Tension as Estimated in the Flexor and Extensor Muscles of the Elbow Joint.

Naotune Watanabe: Ash Deposit in Rock Shelters of Prehistoric Japan.

Masao Suzuki: Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan. Part I-Framework for Reconstructing Prehistoric Human Activity in Obsidian.

編集: [小堀巖 (地理) 理2号館205号室 内線6449]
[清水忠雄 (物理) 理1号館372号室 内線2783]